

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 國學院大學における博物館黎明期： 戦後間もなくの考古学資料室と考古学会

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-12-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下津谷, 達男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001207">https://doi.org/10.57529/0002001207</a>

令和5年度 公開学術講演会

## 國學院大學における博物館黎明期 —戦後間もなくの考古学資料室と考古学会—

下津谷 達男

### 考古学標本室のはじまりと樋口清之先生

下津谷でございます。國學院大學博物館は、今年で考古学標本室の創立から数えて95周年ということですが、私も昭和3(1928)年の生まれでございます。早生まれの3月22日に生まれましたので、当時学部の学生であった樋口清之先生が考古学標本室をお作りになる少し前かもしれませんが、ほとんど國學院大學博物館と同じくらいの年齢を重ねておるといことです。

私が考古学の助手として、あるいは講師として、國學院大學におりました頃には、考古学標本室の後身である考古学資料室が、昭和3年に開設されたという事実に対する意識はあまりなかったですね。ですから、創立の事情はよく分かりませんが、いずれにしても私の恩師でもある樋口先生が、郷里の奈良県などで集められた約3,000点の資料を渋谷にお持ちになって、大学に寄附をして標本室をお作りになった。学生でありながら大学当局を説得して標本室を作るのには、並々ならぬ努力があったと思いますし、また、それだけの才能をお持ちだったということでしょう。

### 戦中・戦後の考古学資料室

考古学標本室は、昭和7(1932)年に国史研究室附属の考古学資料室となり、昭和18(1943)年に本館2階から1階に下されることになりました。これは、1階の学長室に天皇陛下と皇后陛下の御真影が飾ってあり、その上の2階に考古学資料室がある。しかも、そこに得体の知れない人骨(千葉県

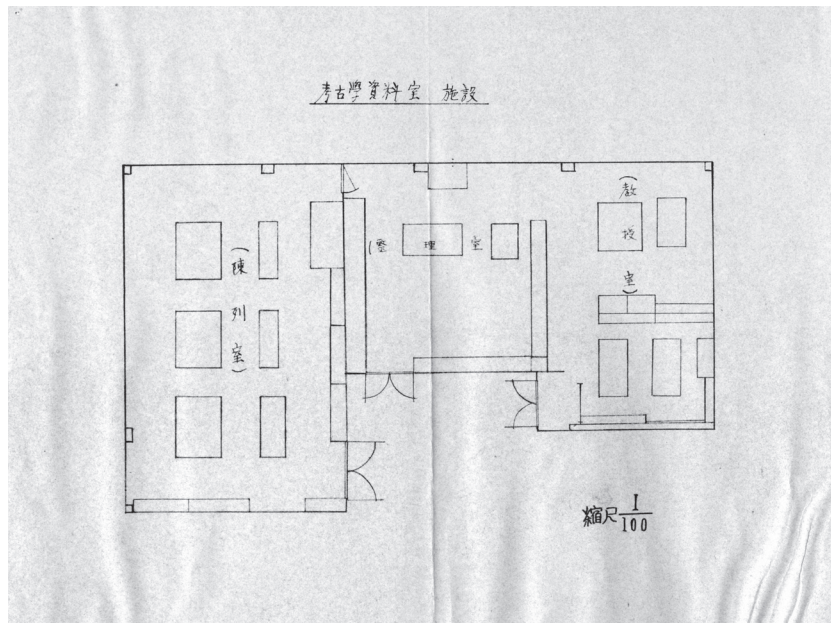
曾谷貝塚出土人骨)があるのは、不敬の至りだと。学生大会で、そのような意見が出されて、資料室を1階に下ろしたという記録があります。私の前任者である小出義治先生は、学生大会ではなく、配属将校の指摘と仰っていましたね。もしかすると、学生大会の動議の裏側に、配属将校の示唆があったのかもしれませんが。

配属将校といっても、今の方はあまり御存じないと思いますが、私どもがおりました旧制の学校では、軍国主義的な軍隊の教練が正課に組み入れられていました。中学2年までは体操的な徒手訓練。3年になりますと鉄砲を使った訓練、いわゆる戦争訓練があります。卒業するまで扱えということで、1人1丁ずつ非常に重い三八式歩兵銃を渡されるのですよ。サビでも見つかったら大変なことになるので、お昼休みや放課後など、年中小銃の手入れをしていました。旧制中学ですと尉官、大学ですと佐官級の配属将校が来ていたと思います。大学でも配属将校の権威や発言力は非常に強かったでしょうから、資料室も2階から1階に下ろされることになったのでしょうか。その後、昭和22(1947)年に資料室が3階に移った経過までは聞いていません。

昭和20(1945)年に戦争が終わって進駐軍が入ってきますと、神道の学校である國學院大學は潰されるのではなかろうかという話もあったそうです。樋口先生は、そのとき國學院を救ったのが考古学だったと度々仰っていました。進駐軍からマークされておったのでしょうかけれども、学校の事情を色々調べる中で考古学資料室が注目され、こういう学問、アーケオロジーもやっとならないかということで、まあ、よかろうとなったと。考古学は、國學院を救ったのだというお話をされたことがあります。

### 國學院大學予科入学の頃

私自身は、昭和22(1947)年に國學院大學の予科から入りましたが、予科の主任教授が樋口清之先生でした。まだ若くして主任教授になられておりました、入学式の後、教室に集まって訓示をされたのですが、最後の一言はいまだに忘れておりません。「私は一度会った人の名前、顔。これは絶対



考古学資料室（本館3階）

忘れない」と。本当かな、と思いましたがけれども、その後も樋口先生の記憶力の抜群さを度々目にすることになりました。もっとも、私が助手をやっておった頃になると、時々「あれ誰だ？」という話は少しありましたから、年を取られていきますと記憶力も多少減退することもあったかもしれません。

そして、私が初めて資料室に入ったのは、昭和22（1947）年の予科入学から半年後、恐らく昭和23（1948）年の正月明けの頃でした。本館を階段で3階まで昇ると、廊下の右手が研究室、真ん中が整理室、左手が標本室。私がいたころは、整理室の入り口が柵で塞がっていた記憶があります。研究室の手前の、書棚で画されているテーブルのある場所が、学生たちがたむろしたところ。朝早く部屋が開きますと、そこにカバンなどを置いてから教室に出かけ、昼食をここで食べたりもしました。研究会なども、この場所でよくやったわけでありました。研究室の書棚には、『史前学雑誌』や『考古学雑誌』のほか、



考古学資料室

発掘調査報告書も一部あり、ここから貸出をしてもらいました。

この写真は、少し後の、私が助手時代の研究室です。右奥が樋口先生。左側は、どなたか分からない。右手前の私は、白衣を着ておりますけれども、恐らく資料室で白衣を着出したのは私が最初です。土器などをいじると洋服が汚れるものですから。その後、白衣を着る人が多くなったようですね。

いずれにしましても、私が予科に入学して半年ほど経った頃、はじめて資料室を訪ねた際には、樋口先生が研究室の奥の方のテーブルにおられまして、傍に2、3人の学生さんがおりました。私は、郷里である千葉県野田市の発掘調査について相談に伺ったのですけれども、そもそも先生を訪ねることになった経緯についてもお話しておきましょう。

### 樋口先生を訪ねることになった経緯

戦争が終わると、いわゆる「歴史」というものが見直される。殊に古代史

につきましては、神話の歴史から実証的な歴史へと。

その一環として、野田高等女学校（後の県立野田高等学校、野田中央高等学校）の教員たちも、文化国家、文化興隆は、まず学校からだということで研究会を組織します。そして、若手で非常に活躍されていた樋口先生を女学校に招き、先生お得意の分野である「お化粧の歴史」について講演を開くことになった。そのあたりが発端なのです。

この講演をお聞きになった先生方の一人に、田中則雄という先生がいらっしゃいました。東京のご出身で、台湾の台北帝国大学（現在の台湾大学）に進学され、東南アジアの歴史、殊にインドネシアなどの研究をやられていた方ですが、御両親が疎開されていた野田へお帰りになって、野田で就職されました。台北帝大では、インドネシアなどを研究するためにオランダ語の古文書を渡され、七、八人の学生に対して、十数人いらっしゃる先生方から入れ替わり立ち替わり宿題を出される。「もうとにかく勉強勉強で、学部生のときには台湾で旅行に行ったことはなかった。あんなに勉強したのは恐らく初めてで、その後もできないだろう」と言っておりましたけれども、とにかく大変な勉強をされた先生です。

その田中則雄先生が、野田高等女学校へ奉職されて、生徒たちに「君たちの家の周辺に遺跡があるはずだ。そこにある土器とか石器とか、そういうものを拾って持って来てくれ」というような宿題を出される。それらの資料を、講演にお出でになった樋口先生に見せたところ、円筒埴輪の破片がありました。ご覧になった樋口先生は、その破片が大きく、割れ口が新しいことから、「恐らくここを発掘をすれば、もっと出ますよ」と言われたらしい。ちょうど、昭和 23（1948）年に結成された野田地方文化団体協議会（現在の野田市文化団体協議会）の中に、野田高等女学校の分科会も入っており、田中先生が樋口先生の発言を紹介して発掘をしたいと申しましたら、文化団体協議会としてもやってみようとなったのがそもその始まりです。

そして、この発掘を実施するに当たって、指導者を樋口先生にお願いできないかということで、「下津谷君、一つ行って打診してくれ」となりました。

私は、そのときに初めて考古学資料室を訪ね、樋口先生にご意向をお伺いすることになったわけです。その時、田中先生からは、「学生さんたちがお出でになっても、交通費は出せません。お金はそれほどありません。しかし、食べ物があります。もちろん寝るところもきちんとあります。ということだけは忘れないで言ってくださいよ」と念を押されました。それで私は、調査費はないけれど、食べ物があると樋口先生にお話しました。田中先生とは、多少お知り合いになっていた樋口先生は、苦笑されて「まあ、仕方がない」「これもしょうがないかな」というようなことを言われました。その結果、正式に田中先生が昭和23(1948)年の3月に國學院大學へお願いに来て、そこで発掘調査の日取りなどを決めることになったのです。

### 初石古墳群・東深井古墳群における発掘調査

昭和23(1948)年3月の後半に、今は流山市に入っております東葛飾郡八木村の初石古墳群を掘りました。野田地方文化団体協議会が経済的な面は後押ししたのでしょうかけれども、田中先生も予算のことは分からないと仰っていましたから、別のところで会計処理をしていたのだらうと思います。あまり大きな成果はなかったのですが、円筒埴輪などが出て参りました。

実は、この初石古墳群を掘りましたときに、これも後に流山市になる隣の新川村で中学の教頭をしておりました山田先生という方が発掘現場へお見えになり、「このくらいの山ならば、うちの方にはごろごろあるよ」という話になったんです。私もびっくりしまして、一体どこにあるかと聞いたら、新川の東深井というところだと。戦争中、油がなくなったものですから、松根油を取ろうということで、「松を抜いては根っこを取って、あちこち穴だらけになっているけれど、とにかくあるよ」と言うのですね。ですから、初石古墳群の調査が終わってから、私もそこへご案内いただきました。17基、18基……それ以上あったかと思えます。

そこで早速、県立野田高等女学校改め野田高等学校とともに、文協の中心になっている野田の図書館……これは興風会図書館（後の野田市立興風

図書館)といひまして、野田醤油株式会社(後のキッコーマン)の外郭団体である千秋社の支援を受けた図書館ですが、そこに勤務しております佐藤さんという方にお話をしました。そうすると、そこも掘ろうじゃないかという話になりまして、翌昭和24(1949)年に、東深井古墳群の調査になったのです。そこでは、魚形埴輪や、鉄刀、鉄鏃、ガラス小玉などが出土しました。

### 野田市郷土博物館の設立へ

このような考古学的発掘の発表会に多くの方が集まったり、新聞などに書き立てられたりしますと、町の中でも文協を中心として、野田には県立図書館より古い図書館はあるけれど、博物館がないから作ろうじゃないかといった意見が出て参りました。発掘した出土資料も、博物館でも作って保存しなきゃいかん。それまでは昭和の初期に大山柏さんの大山史前学研究所が清水野田貝塚などの発掘を行いました。掘ったものはみんな東京へ持って帰ってしまい、野田には何も残っていない。ということで、文協が中心になりまして、市役所にも博物館の創設を働きかけることになるわけです。

市役所の方も乗り気になったのですが、そこには樋口先生が非常に大きな力を貸して下さいました。というのは、博物館を作ろうと正式に決まる前に、國學院の考古学資料室や、樋口先生のお宅にある資料を貸して頂いて、「住居展」あるいは「食生活展」といった展示会をやったのです。展示会をご覧になった野田の町の人たちは、やっぱり博物館は作らなきゃいかんだろうという話になりまして、市も正式にそれを決めていく流れになります。

昭和29(1954)年に、野田市郷土博物館設立準備会ができますと、樋口先生も委員の一人におなりになっている。野田へ会議のたびにお通いになって、それで、いろいろな御意見を出していただくことになり、昭和34(1959)年4月10日に野田市の博物館が出来上がって開館することになりました。博物館法に基づく登録博物館としては、県内第1号となっております。ちなみに先ほどの野田貝塚も、所有者である千秋社ができるだけ保存したいということで、昭和11(1936)年に千葉県指定史跡の第1号となったものです。



## 國學院大學考古学会の日々

ところで、昭和23(1948)年の発掘調査の話にさかのぼります。その時は、女学校を宿舎にして、学生さんたちや樋口先生もお泊りでした。女学校は、私の家から歩いて12、13分ほどですから、成り行きで宿舎に顔を出し、昼間も発掘を手伝うような形になりまして、何となしに考古学の中へ入っていったわけですね。

予科時代は、専門を決める必要がないですから、語学と、それから哲学的なことをやっておればよろしい。ですから、この発掘がなければ、あるいは違う分野に進んだかもしれません。中学時代は、教科書の軍記物を読んでおりましたので、『平家物語』などを研究することになったかもしれませんね。しかし、私の一生を決めたのは、その発掘調査。言葉を変えれば、田中則雄先生が私のうちへ来て、樋口先生への仲介の労を取れと言われたことが、そもそもの発端であります。

こういった発掘調査に加わりながら、考古学資料室を拠点として、國學院大學考古学会の活動も盛んにやりました。学会の中に、縄文部会、弥生部会、古墳部会、それから歴史部会という4つの部会を設け、部会長が責任を持ってやる形にしたわけです。その頃、旧石器の存在は全く考えに及ばなかったけれど、北海道白滝の黒曜石の石器も資料室にありましたね。資料室では、大場先生、樋口先生、そして樋口先生より1年後輩だと思いますが人文地理系の中川徳治先生にお願いして、毎月1回くらいの研究会を続けました。新入生が入りますと、新入生歓迎会。歓迎会の後は史跡探訪で、市川辺りを中心にして、堀之内貝塚とか、国分寺・国分尼寺などを歩く催しがありました。

また、先ほど申し上げましたように、先生方の月一遍の講座もあります。それから、時々卒業生がお出でになりますと、その地域の考古学の状況などの話を頂いたわけです。本学の教授になられた乙益重隆先生も、熊本女子大におられた頃、度々こちらにお出でになられまして、九州考古学の事情とか、あるいは装飾古墳であるとか、そんなお話がありました。もちろん突然の

話ですから、十分な用意などはありませんが、関西であるとか、東北であるとか、あるいは九州であるとか、そういうところの情報を知る非常によい機会であったと思うわけでありませぬ。

### 学会誌『上代文化』の編集

『上代文化』という考古学会の機関誌は、学会が上代文化研究会という名前であった頃の昭和3(1928)年に創刊されましたが、戦争が厳しくなり、第17輯で休刊になりました。第18輯は、戦争が終わって、私の入った昭和22(1947)年に出されます。この第18輯を編集されたのが、金子量重さんという非常に能力がある方で、学生時代から活躍されておりました。横浜の鶴見にごぞいます鶴見神社の家だったと思いますが、アメリカ人相手の劇場などでアルバイトをされており、卒業後は神社を弟さんに譲ってアメリカ大使館に入り、日本の情勢などを分析する分析官みたいな仕事をされたようです。どういう仕事か伺ったことがあるのですが、大使が日本国中を歩かれる時、行かれる場所を調べて、先々にいらっしゃる地元の人、有名人、その他の履歴を調べる役割をしていたと。アメリカ大使になると、用意周到なことをするものだと感心したこともあります。

この第18輯を編集する時に、私もちょっと手伝っています。第19輯は、私が編集したのですが、だんだんとお金がなくなってまいりました。学友会から配当される資金はあったのですが、雑誌を出す会が増えて参りますと雑誌の費用までは回せないことに。そこで、第19輯でも広告は取りましたが、第20輯はもっと大々的に広告を取り、卒業した先輩にお願いして寄附をいただくじゃないかと。学術雑誌にふさわしくない広告もあるということで、後で先輩から怒られたこともありますが、お金がなきゃどうしようもないということで、とにかく金集めに奔走しました。

それで、記念すべき第20輯は、特集をやらうじゃないかということで座談会を計画します。「日本に於ける原始信仰の諸問題」というテーマで、大場、樋口の両先生に、中川先生も入りますし、明治大学で教えておられた後藤守一

先生にもお願いしました。後藤先生も、國學院で教鞭を執られておりましたので、まんざら知らない仲でもない。また、國學院にいらした宗教民俗の堀一郎先生とか、国文関係で民俗学の西角井正慶先生とか、慶應考古学の西岡秀雄先生といった方々に、大場先生からお願いして頂いて座談会を開催したのです。

### 雑誌刊行費用の捻出顛末

その速記に関しては、小宮君、昔は山本と言いましたけれども、小宮隆信君に頼もうと。小宮君は、父親が柏町の助役やっておりましたから、父親から頼んでもらって議会の速記者などに安くやってもらおうと段取りをつけました。印刷も、東京は高いので、信州松本出身の人に印刷屋を当たってもらって長野県でやりました。明治神宮をはじめ寄附金も集まり、広告収入も集まりましたが、どうしてもある程度足りない。そこで、お宮さんを見回すと、裕福なところはお伊勢さんだと。それで、これも大場、樋口両先生にお話ししまして、お伊勢さんの寄付をお願いしよう。旅費は、我々自分たちが自弁する。宿舎は、会員の中に猿田彦神社の宇治土公貞俊君がいたので、実家へ電話してもらったらオーケーだと。こちらからは、私と小宮君と、3人ほどで行くということで、大場先生から寄附金のお願いを兼ねた紹介状を頂きました。神道考古学の創始者でもある大場先生は、ご存知のように内務省神社局の考証課におられた頃に、全国の神社の来歴などを調査して歩いた先生ですから、神社界には非常に顔が広いのです。

そこで、いつ頃行こうかと相談しておりましたところ、樋口先生から突然、「ちょっと下津谷君、来い」と。それで、樋口先生と一緒に大学の小林理事長のところに行きまして、理事長に経緯の話をしました。そうしたところ、理事長は「実は、お伊勢さんには大学として非常に大きな経費をお願いしている。そういうところに、寄附のお願いをやられたらちょっと困るのだ」と言うのです。困ると言われても、こちらも困るということで、擦った揉んだがあったのですが、小林さんから「一体幾ら要るんだ」と。「これくらいはお願いしたい」と言ったら、「『上代文化』20輯を、大学のお客さんのために

配るものとして買い上げるから、本ができれば、10冊、20冊でもいいから持ってこい」という話になったのです。これはしめた、と。我々の方は、お金さえ入れればいいのですから、伊勢に行く必要はなくなりました。

ただし、小林理事長から念を押されましたのは「この話はよその学会に話をしちゃいかんぞ」と。国文学会とか、史学会とか、いろいろ雑誌があるところに話をすると、「じゃあ、大学が買上げをやってくれということになってくると困るから、これは絶対よそに言っては駄目だ。考古学のお前さんだけの懐におさめてくれ」と言われましたものですから、「分かりました」と。

というわけで、無事に発行したのですが、どういうわけか印刷の日と発行の日が大分ずれております。その辺が、どうなっておったのかよく分かりませんが、面白い話といえば面白い話ですが、あまり外には出しては困るというようなお話でございました。

### 國學院大學の発掘調査

この頃の思い出に残るのは、自分たちがやった発掘。大きなものと、大場磐雄先生が主宰されました長野県塩尻の平出遺跡。これは何回もやりましたけれども、我々学生は昭和電工の寮に泊まりまして、そこから調査地に通いました。ある時、オリエント考古学をやっておられた三笠宮さんが、大場先生とも親しかったので平出遺跡にお出でになりましたね。調査に当たっては、原嘉藤さんという方がいろいろ面倒を見てくれたのですが、地主さんたちの了解を取りつけるのが大変だったらしいのです。その話をお聞きになった三笠宮さんが、「私も御挨拶に行きましょう」ということで、親しく地主さんの家を「よろしく頼みます」と言って回られたのです。当時のことですから、皆さん畏まって、どうぞどうぞということになり、発掘が非常にスムーズにいくといったこともありました。それから、発掘を嫌がった人たちも、掘りますと天地返しになって明くる年の麦などの生育が非常によろしいということで、掘る予定地じゃない場所も掘ってくれ掘ってくれというような笑い話的なこともありましたけれども。

それから、今の群馬県伊勢崎市にあたる采女村の古墳。これも大場先生の調査ですけども、我々の1年上の金子量重さんが発掘の段取りをしてくれました。横穴式石室でしたが、天井石はもうありません。昭和23(1948)年6月28日のこと。いきなり地面が揺れまして、両側の壁が崩れるくらい。びっくりして、慌てて石室の外に飛び出しましたけれど、これが福井地震でした。報告は、『上代文化』第18輯に出ておりますが。そういう発掘をやっては、報告会も資料室の学生が集まる部屋を中心にしてやりました。

それから、千葉県の柏でも、色々と発掘を致しましたね。この調査も、我々は自分たちで金策です。役所に行って経緯を話し、こういう場所をちょっと調査したいので予算を出してくれと言いますと、なかなか普通は出ないはずで、もちろん少ないのですけれども、何とか捻出してくれました。発掘は、ほとんど自炊。御飯炊きがあまり上手くない私は、一度焦がしたことがあります、それからは自炊免除になりまして、その代わり買い出しなどの役割が中心に。今ですと、うるさい問題になるかもしれませんが、雨になって、今日の調査は1日休みとなると、食事は1食くらいに制限して調査をやったのです。

## 昭和20年代前半の食糧事情

私が大学に入った昭和22(1947)年の夏休みは、始まるのが非常に早かったですね。普通、大学の夏休みは、7月10日、15日前後あたりからなのですが、そこまではとても持たないと言い出したのが寮生です。当時は、大学の武道館の一角を区切って寮にしておりました。どう寮生に食事を出していたかは知りませんが、彼らが「食糧事情がこんなに悪くては、俺たちは死んじゃう。休みを早くしてくれ」と大学に掛け合い、多分6月の終わりか、あるいは7月初めくらいからに休みになったのですよね。国に帰って、ゆっくり栄養をつけようと。学生大会とまでは行かないけれど、寮生たちの意見によって夏休みが早くなった。そういう点でも、当時の食糧事情が非常に悪かったことがお分かりになると思います。

予科に入りまして2年目あたり。考古学資料室に出入りする頃ですが、

学校の帰りに寄る喫茶店がありました。喫茶店といっても、お好み焼き屋のような程度です。そこで無駄話をしておりますと、店のおばさんが「うどん粉がないから焼けない」と。そこで、自宅から通っていた学生は、うちから粉を持ってまいりまして店に預けると、お好み焼きとか今川焼などを焼いてくれる。そういうようなことで、「今日は俺のでやってくれや」などと言いながら、友達と一緒に食べたことも記憶にありますね。

### 登呂遺跡の調査体制

そのような中で、昭和 22 (1947) 年から登呂遺跡における戦後の調査が始まるわけです。登呂遺跡では、昭和 18 (1943) 年にも調査をやっておりました。三菱重工が戦闘機のプロペラをつくる工場を建てるので、急いで埋め立てて工場用地にすることになったのです。大場先生も行かれたようですが、軍需工場の用地ですから憲兵などが出張っており、その監視の中で調査をして、いつまでに調査を終わらせなきゃ駄目だとか厄介なことがある。あるいはフィルムを没収されるなんていうことがあったらしいけれど、とにかく苦難を乗り越えて住居址 1 軒と溝、畦などを見つけております。その記録類は、静岡市が保管しておったのですけれども、空襲で焼けてしまいました。

明治大学を卒業した杉原荘介先生は、戦争で中国大陸に行っており、「生きて帰ったら登呂を掘る」と言われていたらしいのですけれど、復員して文部省に入る。そして、後藤守一先生と一緒に申請したのが、登呂遺跡の調査の科学研究費です。「駿河・富士見ヶ原における古代農耕村落の研究」というテーマで出しましたところ、5 万円の補助金が下りた。そこへ県が 20 万円、静岡市が 15 万円、合わせて 40 万円かな。そのとき、後藤先生と杉原先生が考えたのは、考古学だけではなく、人類学、日本古代史学、地質学、動物学、植物学、建築史学、河川工学、農業経済学など、色々な分野の学際研究でやっていこうと。当時としては、卓見でありますね。しかし 40 万円というお金は、当時としてもそんなに大きなものではありません。

それで、考古学をやっておる大学、明治とか、國學院とか、東大、早大、

慶大とか、その他の学生の応援を頼もうということで、日程を3期に分けまして、1期に各学校から5名ずつ、國學院も5名、合計15名の学生を出してくれと。そういう話になります。学生の選考は、國學院の場合には、大場・樋口両先生の了解を得た上で考古学会が選考致します。上級生が選ぶということですね。

私は、2期から加わりましたので、初年度のことはよく分かりませんが、食糧事情が非常に悪かったらしい。米とか、それに代わる食糧持参。中には、外食券を持って来た人もおるそうです。この間、お亡くなりになった明治大学の犬塚初重さんから話を聞きますと、学生だった彼が事務局をやっておりまして、ジャガイモの皮をもらってきたり、捨ててあるようなものも貰ってきたりしたようです。雑炊、おかゆ、すいとん、そんな食事だったらしい。「登呂のすいとん、とんがない」という歌ができたくらいだったそうです。

森戸辰男さんが文部大臣をやっておりましたが、国会の文教委員会で登呂遺跡の見学をしたところ、学生が口を開けば「腹減った、腹減った」と言って、雑炊をすすっていたと。これはあんまりだということで、米2俵が特別配給になった。米よこせ運動なんていうのがあった時期ですから、非常に大変な時代ではあったのです。

私が参加した2年目は、食糧持参ではなかったと思います。女学校の寄宿舎でしたが、雑炊はあまり記憶になく、御飯を食べましたね。量は少ないから、お腹は年中すいていましたけれども、とにかく御飯は食べた。おかずが何だったかは、忘れてしまいましたが、発掘調査では、登呂遺跡の時に、初めて交通費と日当をもらいました。これにはびっくりしたのですけれども、帰りの電車賃を考える必要がないわけですから小遣いは使うことができます。ふたを開けてみましたら、1日の日当が7円。もらえないものをもらえて喜んだわけですが、真夏の中で一番よく売れたのは、1本3円のアイスクャンディー。ほとんど売切れ状態になります。その日当7円を出すのも、事務局は大変だったろうと思いますが。

## 泥沼の発掘現場

登呂遺跡の調査には、皇太子殿下もお出でになっています。杉原荘介先生は、皇太子殿下が掘る場所を決めておりましたね。その場所は、ちょこっと土器が顔を出していたのです。そこで、少し埋めて「殿下、ここをどうですか」ということで殿下が掘ってみると、ぽっと土器が出てくる。まやかしじゃないかな、ということも我々は言ったこともあるのですが、いずれにしても登呂遺跡の仕事は、非常に思い出深いですね。

台北帝大の助手をやっておった中川成夫先生は、帰られて東京大学の助手をやっておりました。なかなか辛口の先生で、いろいろな評が非常に辛く、学生から大分嫌われておったのですけれど。なぜか私の場合は、「下津谷君、こっちに來い」とよく言われて、中川先生と一緒に調査をしました。

私は、登呂遺跡の調査を2年と3年でやりましたけれど、何かあったのか4年目は行っていません。参加した調査も、遺跡の中に入って発掘した経験は4、5日しかない。何をやっていたかという、トロッコともっこ担ぎです。登呂は、軍需工場を作るため、3メートルほど土を盛り上げてある。調査に入る前に、静岡市が盛土を除去しておいてくれる約束だったそうですが、現地に行きますと全然やられていない。そこで、調査員で入ってきた学生の大部分を、トロッコ部隊、もっこ部隊に振り分けた。結果、登呂遺跡の発掘現場に入れたのは、割合と少人数だったのです。

もう一つは、見学者が非常に多く、各学校で見学にやって参ります。見学にやってくると、調査員じゃないのだけれども、見学者を現場の中に入れて調査をやる。一方の我々は、調査員として動員されたけれどトロッコをやっておる、というようなことで大分不満もありましたけれどね。しかし、トロッコのレールの敷き方、もっこの担ぎ方、それらを本当の土方さんから教わりましてね。それで登呂遺跡の調査をやったのですよ。

何日かは遺跡に入りましたけれども、これも湿地帯ですから非常に大変で、腰を下ろすことができません。ほとんど中腰の作業で、周りが十分掘られて



いないものですから、大きなタコツボの中に入ってやるような調査。炎天下で、下からムンムンと蒸気が上がってくる。地上のトロッコ部隊は、海岸から風が吹いてきまして、割合と風通しがいい。もっとも地上ですから、まだいい。そんなことで、一度遺跡の調査へ入りましたけれども、またもっと部隊、トロッコ部隊に戻るというようなことでしたね。

私は、10日の約束だったのですが、なぜか残れと言われて20日間やりました。しかし、ああいう作業は、大体15日ぐらいが限界だと思いましたね。あとの5日間くらいは、何となくふらふらやっている感じ。登呂遺跡では、もっと担ぎ、レール敷きや、トロッコから土砂を流す時のやり方とか、そんなことを大分勉強した記憶のほうが強いような気がします。

## 日本考古学協会の結成へ

登呂遺跡の調査には、最初科学研究費が5万円出たわけです。それで文部省も遺跡の重要性は十分に理解しましたが、個人研究に出すお金には限界がある。個人研究から団体研究にしなきゃいかんということになりました。文部省の課長であった犬丸秀雄さんが杉原先生を通して後藤先生などに働きかけ、受け皿をつくってくれと。そこで杉原先生の大活躍が始まる。これはもう東京だけの学会というわけにはいきませんから、大阪、奈良、その辺りの主要な先生方、梅原末治先生はもちろんですけど、末永雅雄先生とか、そういう方々にもお話をした。日本考古学協会の始まる歴史ですね。

それで第1回、第2回の会議は、上野の国立博物館、昔の講堂脇の会議室でやったわけですが、個人を会員とするか、京都大学をはじめとして各地にできた色々な研究会を会員とする学会とするか、大きく2つの考え方に集約されてきたわけです。それで、いろいろ検討した結果、あくまで個人を対象にした学会のほうがよろしかろうとなりまして、昭和23(1948)年の4月に日本考古学協会ができて上がる。そこで考古学協会に「登呂遺跡調査特別委員会」という受け皿ができたものですから、国・県・市から頂いた2年目の予算が総額105万円。3年目が220万円、4年目の昭和25(1950)年

が合計 100 万円だったかな。

## 大学間の研究交流

ですから、私が行った 2 回目は、多少裕福になったときなので、お米の御飯は出ました。足りない分は、自分たちの小遣いで何とか賄ったというもの変ですけども。当時、静岡駅前に昼夜食堂といまして、昼も夜も開いている食堂があったのです。そこへ夕食が終わった後で出かけまして、お腹をいっぱいにして、あるいは焼酎を飲んだりして帰ってくる。登呂遺跡から静岡駅までは、約 4 キロも砂利道があったのですよね。ペラペラの草履みたいなものを引っかけて行って、そこで食べて、また帰ってくる。よくやったものです。それから、見学に見えた方々の差し入れにもありつきました。

そんなことで登呂遺跡の調査は終わるわけではありますが、各大学の学生交流ができました。調査の方法も大学によって違っていましたが、それをお互い話し合い、各大学の流儀以外のものを参考にしたり、改善したりというようなこともあり、非常に勉強になったということですね。

学生同士の交流ができたものですから、第 1 回目の調査が終わって帰ってきてから、東京学生考古学会ができるのです。東京学生考古学会は、昭和 22 (1947) 年 11 月だったかな。11 月 3 日あたりに記念して開いたかもしれませんが。それを言い出して主導したのが、先ほど申し上げました國學院の金子量重さん、小出義治さん、それから亀井正道さん、永峯光一さんといった方々です。その関係から、当番校といえますか、國學院が主導して東京学生考古学会が出来上がりました。

私も、金子さんの遣い走り、明治の研究室なども年中出入りをしておりました。もちろん登呂での顔見知りもできましたし、その関係で授業料は払わなかったのですけれども、明治大学の講座も聞いたことがある。藤田亮作先生が朝鮮考古学を明治で講義しておられたので、先生に願したら「いいよいよ」と。受講者が少なかったので明治の研究室へ行って、一緒に講座を聞かせてもらったのですけれど。いわゆる学問的なもの以外の話も出て

まいますし、受講生はほとんどが顔見知りという中での講義ですから、割合と面白く楽しくやれたことも記憶にあります。

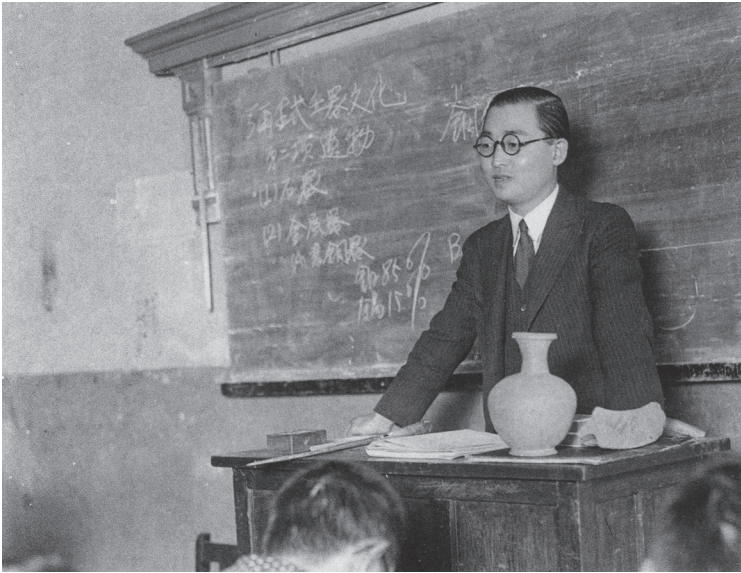
そういうようなことで、登呂遺跡の調査に関係して、色々な人たちと知り合いになれたことも、後々非常に大きく役に立ったことになります。学会活動をするにしましても電話一本で話が通ずるようになってまいりましたので、個人としても役に立ったことになりますし、あるいは考古学資料室としても非常に有意義だったのかなと思います。

大場先生の関係になると思いますが、登呂で出土した木器を國學院の考古学資料室が保存することになりまして、資料室の展示室に木の箱を作って一部保管していました。そこへホルマリンを数滴垂らして保管するわけです。何日かおきに水を換えなきゃいけませんから、みんなと一緒に水換えをやるなど、木器を直に見る機会もありました。その後、考古学資料室にお出でになった末永先生は、唐古遺跡の木器のことをよく話されました。唐古遺跡は、掘ると本当に現代のものと同じようなものが出てきて、びっくりしたと言うのですけれども、そのまま置いておきますと曲がってしまうものですから、乾かないうちに宿で夜中にかけて実測を取り、実測が終わったものは菰に包んで宿の池へ浸しておいて、翌日すぐに京都へ運んだと言われておりました。

## 樋口先生の思い出

さて、時間もそろそろですので、ちょっと樋口先生の話も幾つかしておきたいと思います。

お若い頃の樋口先生は、髪が非常にフサフサしておられた。我々は、きれいなでつけられた先生の頭髮が、ピカピカ光っておられたのをよく覚えております。普通の櫛ではできないな、と思っておったのですが、先生が野田へ調査でお泊りになった朝、たまたま洗面所で頭を梳かしている姿を見て、なるほどと思ったのです。先生が使っておられた櫛は、日本髪で使う目の細かい梳き櫛だったのです。これは、皆さんにあまり言わなかったのですが、樋口先生の秘密を見つけたな、と思って喜んだ記憶があります。



講義中の樋口清之先生

また、樋口先生は近畿日本鉄道の株をお持ちになっていたようで、株主優待乗車券をいつも手帳に入れていたらしいのです。細かいことは覚えていないけれど、学部は夏休みに入る前に、樋口先生に「奈良へ行きます」と話したら、ポケットから手帳に挟んであった優待券のつづりを出して、「これを持って行きなさい。これを使えば近鉄は全線無料だから」と。それからの私は、奈良あたりに行くときには、名古屋までしか国鉄は使わないで済みました。私以外にも、小出義治さんや、何人か頂いた人はいるかと思いますが、非常にありがたいことでした。

それでは、今まで誰にも話していなかったことも。樋口先生の講師謝礼の件です。先生を訪ねてきた卒業生たちは、四方山の話をした後、「ときに先生……実は……我々の会で、あるいは我々の学校で、先生にお話しを頂きたいのです」となる。そこで樋口先生は、予定が空いてればすぐに快諾されますが、大概の卒業生の言いにくそうな「御礼の件なのですが……」という問いかけ

には全部を言わず、「いいよ、分かっている、分かっている」と言って席を立たれるのです。樋口先生が去られた後、私が先生への御礼は幾らか聞いてみると、今の相場で1万円、ひどいときは5千円くらいの場合もありました。だいたい、1万円から2万円に相当する程度が多かったですね。

ですから、割合とお金には恬淡とされた方なのですが、実は一つ面白い話がある。私は、助手を辞めて講師になり、野田市の博物館に移りました。あるとき、キッコマンから総務課長がやって参りまして、樋口先生に「お話を頂きたいのですが、いかほど差し上げたらよろしいでしょうか」と直接伺ったと言うのです。樋口先生も、びっくりされたのでしょうか。「野田地方の、そういうお話については下津谷君に一任しております」とお答えになったとのこと。しかし、私に言われても困るのです。役所関係ですと、一応ある程度の決まり的なものはありますが、ここで数字を出すところちょっと具合悪いな、ということで「懐具合はどのぐらいですか」と探りを入れました。大概の返事は、向こうのお考えの低い方の金額を言うてくるのです。それも大体見当つきますから、「それじゃ……」と首をかしげますと、ちょっと上がるわけです。そんなことで、ある金額で落ち着いた。キッコマンがそうでしたし、茨城県の今で言う坂東市の教育委員会も聞いてきましたね。樋口先生は、「そういうことは下津谷君が、この辺のことは取り仕切っているから」なんて言って逃げちゃうものですから。

この事は、私も樋口先生には黙っているし、樋口先生も何もおっしゃらない。お互いに暗黙の了解といたしましょうか。そんな樋口先生は、私にとっての恩師である上に、野田の文化行政を方向づけしてくれた先生でもあり、地域にとっても非常に意義深い恩義のある先生だということですね。

### おわりに—学生を育てる博物館—

ともあれ、我々を育ててくれた考古学資料室が、いまや創立95年。このように非常に長い歴史を持つわけですが、これから先も、ずっと50年、100年先までも國學院大學博物館がある。大学に博物館を設けた例は、やはり

國學院大學が古い方ですからね。

私は、日本の大学で博物館学の講座をつくるときには、博物館を必ず待たなきゃいかん、入れるべきだと文部省にも提言したのですが、それはとうとう通りませんでした。大学設置基準の中には、図書館は規定されているけれども、博物館はないのです。そのため多くの大学では、博物館を持たずに博物館学講座を開くというようなことになるわけです。しかし、そういう意味では、國學院大學は先駆的な役割を果たしてきた。考古学資料室は、我々が巣立ったところは、非常に先駆的な役割を果たしたものであることに感謝しながら、ありがたく思いながら、私の話を終わりたいと思います。

時間も大分過ぎたようでございますが、長い間、御清聴ありがとうございました。

— 了 —